

幼児教育の根元



——フレーベル著『リナはどうやって
文字を覚えたか』の教えるもの——

莊 司 雅 子

(一)

『リナはどうやって文字を覚えたか』という物語は、幼稚園の創立者フリードリヒ・フレーベルが幼児教育の専門雑誌『週刊誌』に連載したものである。それは深い理論的な研究をした後、思想が円熟し経験も豊かになった晩年のフレーベルが、幼児の日常の生活を浅く具体的に描きながら、リナという六歳になる女の子がどのようにして読み方や書き方を学ぶかをわかりやすく説明しているものである。それはお母さま方や先生方に読ませるためのものではなくて、お母さま方や先生方が、子どもたちに読んで聞かせるためのものでもある。そのために内容はきわめて親しみやすいものである。

『リナ』の物語のなかには、だいたいな教育原理が深く流れている。しかも読む者は、ほとんど抵抗をおぼえずに、それをとらえることができる。たとえば、今日、新教育でとえられている生

活教育の原理や自発性の原理、または子どもの成長発達に即する原理、さらには「なすことによつて学ぶ」というデューイの教育標語などがすべてこの物語の底流になっている。教育は生活から始まり、生活のためにかえらなければならないというのが、フレーベルの立場である。この物語を読む人はこれが今から百数十年前に書かれたとは思えないほど、新しい教育原理をみつけることができる。特に幼稚園教育の義務制や就学年齢の引下げについて、多くの論義が交わされている今日、就学前の幼児の読み書きの学習問題はたいへん重要視されている。このようなときに、フレーベルのこの『リナ』ほど私どもに多くの示唆をあたえるものはない。この物語の大まかなすじはこうである。

リナは六歳になる女の子で、幼稚園を終えて小学校に入る直前にある、きわめて創造活動にもえている元気な子である。この物語の最初にリナの性格をフレーベルは描写している。これはフレー

ベルの眼にうつるすべての幼児の姿を、リナに代表させているのである。幼児というものは、本来自分自身から学びたがるものであり、自分の目で見たもの、耳で聞いたことを、自分の口や手その他身体全体でもって外にあらわしたがるものである。また周囲にある簡単な材料をもつていろいろなものを作りあらわしたがる。だから幼児は朝から晩まで、健康であればたえず忙しく動き回り、たえず歌ったりおどったり、つくったり描いたりしている。そしてこのように遊びを通して、いろいろあらわすことによつて幼児は成長している。つまり本来、幼児のうちにあるものもろの素質や能力の芽生えが伸びてくるのである。

フレーベルはこのような幼児の自然な姿から、幼児のうちに本来すばらしい創造性があると思ひ、そしてこれはまさに神さまからあたえられたたまものであると解釈した。そこでこのすばらしい旺盛な神的な活動衝動や創造衝動を健やかに伸ばすことこそが、幼児教育でなければならないと思つた。そのためにフレーベルは幼児に遊ばせつつ、その創造性を伸ばすための玩具を自分で工夫し創作した。そしてこの玩具を家庭の子どもにもたせて家庭で遊ばせたり、幼稚園で使わせたりした。その玩具をガーベ（ドイツ語）という名前をつけた。その意味はたまものということであるが、フレーベルはたいへん宗教的な人であつたから、この玩具は前述したように、幼児のうちにあるあのさかんな神的な創造性をきたえるために神さまからあたえられたたまものであるとい

う意味でガーベと命名した。

この物語の初めに次の一節がある。「リナは簡単なおもちゃでいろいろな遊びをすることができ、さいころや丸い棒のようなものでも、リナの手にかかるときれいに組み立てられ、また色や形の違う板や棒はとても美しく並べられます。細長い色紙や棒などをいろいろなに組合せたり、思いがけない美しいものを作り出したりますというふうには、リナはちよつとしたものから、何でも自分の好きなものを作ることがお得意です」。ここにでてくるさいころ、とか丸い棒とか、板や棒または色紙などは、すべてフレーベルの考案した恩物の一部である。

フレーベルは幼児がおもちゃを使つて自分で自分の力をきたえることができると思ひていた。またおもちゃをじょうずに扱う子どもは、やがて他の物をも、しつかり扱うことができると思つた。このことについてフレーベルは、リナを例にあげて次のように述べている。「リナはボールを受けることもじょうずにできますから、動作が機敏で、道具を扱ったりするやり方もすぐに覚えます。だから無器用に物を落としたりすることがなく、自由に手足を動かすことができます」。このようにリナは日ごろからおもちゃを友として自分の家で遊んだり、幼稚園で友だちと遊んだりしている。そのためにほかの子どものように、たえず母親につきまとい、始終、何かをねだったり、ぶつぶつ不平をこぼしたりすることができない。恩物で十分に自分の思うようなことをして遊ぶことができ

るからである。これは遊具のもつ重要な意義をフレーベルが私どもに示している。幼児は手元に何かを表わすものがあれば、それで満足するものである。ただその手元に何をあたえるか、というところにフレーベルの教育的なおもちゃの意味があるわけである。

(二)

フレーベルはつねに幼児の立場に立って教育を考えた人であった。だからリナの読み書きの学習の過程をみてもわかるように、あくまでもリナの方から学びたいという希望が先にあらわれてきた。それを受け取り、リナの母がリナの成長発達の数度にあわせて教えてゆくという順序で行なわれている。ここにフレーベルの自発性の原理が流れている。物語にあるように、リナは父親がある日一通の手紙を受けとってとても嬉しそうにそれを読み、まもなく同じように嬉しそうに返事を書いて出しているのを見て、自分も手紙を書きたいという衝動にかられた。家庭における自然の生活の中に、子どもは学習意欲が湧いてきたわけである。この子どもの方から出たその衝動をいちはやく教育的に導くか否かというところに、教育的配慮のありかがある。もちろん母親は、リナの希望を決して無条件に受けとらず、しかし十分にそれを果たしてあげる方法をリナに授けた。母はリナが急にペンや鉛筆で紙におとなのように字を書くことは無理であることを知っていたから、母は日ごろリナが遊んでいる棒きれをもって文字を並べることから始めさせた。これは、学習はつねに子どもの体験に根ざし、

すでに知っている事柄から始まり、やさしいことから難しいことへ進むという順序でやると、子どもに抵抗なく、容易にしかも確実に会得することができるからである。しかし子どもはとにかく一足飛びにおとなのようにやりたがるものであるから、おとなはそれを導ききわけさせて、階段を上るように一步一步すすめるようにしなければならない。

リナの母親はこの教育の術をよく心得ている。そこで母親は、まず一番に必要でありしかもリナにもっとも近い親しい文字、リナが進んで学びたいと思う文字の学習から始めた。それはリナの名前である。母親はまず、リナにリナの名前をゆっくり発音させ、そのなかにどんな音や響きがあるかを注意させ、気づかせることにした。母親はリナにいった。「名前を書けるようになりたいたときには、まず初めに名前を正確に聞いて、その中の音や響きをあらわす符号や文字を覚えるのよ」。すべて正確に聞いてから文字を並べることを学び、それから石筆で石盤に書き、そのうえで鉛筆で紙の上に書くという順序で母親はリナに教えた。こうして「リナ」の文字を覚えたりナは進んで「おかあさま」「おとうさま」などと、身近な言葉の文字を書くことができるようになった。こうした順序で母はリナが最初望んだ手紙を書くことができるように導いた。母の導きでリナは書き方から読み方へ進み、読み方からさらに書き方を学んだので、リナの進歩は早かった。

(三)

フレーベルはこの物語を通して私どもに何を教えようとしているか。子を思う親の心、生徒をよく教えようと努める教師の努力は、いずこの国においてもまたいつの時代でも変りはない。ただ子を思うあまりに親本意になったり、教えよう教えようと努めるあまりに生徒の自学自習を妨げたりする。このようなことに気づかない親や教師にとって、『リナ』は多くの示唆をあたえてくれる。なるほどここに出てくるリナという子はきわめて健康で頭もよい。しかしすべての幼児は多かれ少なかれ、リナと同じ意欲と創造性と活動性をもっている。これはフレーベルの目にうつった幼児の共通の姿をリナに代表させている。私どもはリナを通して幼児の本来の姿を見ることが出来る。幼児はおとなからいわれなくても、たえず自分で何かを学びたがるものである。おとなの世界や動物や植物、その他の自然界にいつも大きく目を開き、耳をそばだてている。この幼児の目の動き、心のおどりをおとなが見取り、聞き取って、それを幼児に適する仕方で導くことがほんとうの幼児のための教育といえる。リナの母親はリナが自分から進んで学びたい意欲が強く出てきた時に、リナの成長に即した方法でリナに書き方を教えた。その書き方の学習は、すべてリナが自分でやるようにしむけた。そしてできない時だけ母親がそれを助けた。

教える者はしかし単に消極的な受身的な態度だけでは、子どもの発達を促進することはできない。積極的に適当に子どもに暗示

をあたえたり、刺激をあたえたり、激励をしたりしなければならぬ。『リナ』では、父親と叔父の二人がたえずこの役を演じている。叔父はときどきリナが悲しむぐらいに刺激をしたり、ときには大きなげましをしたりする。リナがその刺激やげましにたえられないと、母が助けの手を伸ばす。このように教える者と教えられる者との間には、いつも能動的な面と受動的な面とが交互に働き合うものである。教える方がいふべきところははつきりきびしく、教えられる子どものいうことをきくべきところはどこまでも受身でよく、という教えがこの『リナ』に出ている。

リナはまた次のことを私どもに教えている。学習はつねに一定の順序をふまなければならないこと、そしてそれはまず子どもに一番身近な事柄から始まり、順序を追って連続的に行なわれてはじめて効果があがるものであるということである。

今日、就学前の幼児に読み・書き・計算をどの程度に教えるべきかについていろいろ論議されている。『リナ』はこのことについて多くの示唆をあたえてくれている。書き方以前の言葉の正しい発音がまず大事であること、その前にまず正しい聞き方が必要であることを強調している。つまり正しい聞き方と話し方を経て始めて書き方に移るのである。そして書き方から読み方への学習が導き入れられ、この読み方がさらに書き方の上達へ導くというのが『リナ』の教えである。

（広島大学教授文学博士
日本保育学会副会長）
「リナはどうやって文字を覚えたか」はフレーベル館より発行